

近代の文末表現について

—啓蒙書を中心に—

朴孝庚*

(e-mail : phk0827@hotmail.com)

目次

1. はじめに
 2. 啓蒙書の文末表現
 2. 1. 『真政大意』の文末表現
 2. 2. 『百一新論』の文末表現
 2. 3. 『ものわりのはしご』の文末表現
 3. 啓蒙書の文末表現の特徴
 3. 1. 「でござる体」と「である体」の違い
 3. 2. 「でござる体」の消滅
 4. 終わりに
-

1. はじめに

啓蒙書とは、明治啓蒙思想をもとに書かれたもので、一般的に福沢諭吉ら明六社の人々によって書かれたものを指す。啓蒙家の活動は哲学思想だけではなく、社会・法律の人文科学と自然科学まで、実に様々な分野の翻訳・著述に及んでいる。その中で多くの知識人は西洋からの新しい文物を伝えるにより相応しい文体を求めて、口語を取り入れた様々な文体を試みていた。本稿では、明治初期に書かれたものの中で、口語を用いて書くことへの試みがなされた作品を選び、その文末表現を調査・分析することにする。

啓蒙書の文末表現に関する研究は、近代語と文体の研究でたびたび扱われてきたものである。まず、中村通夫（1948）、湯沢幸吉朗（1954）、辻村敏樹（1968）によって早く

* 立教大学日本文学研究科 博士後期課程

からその研究が始まり、杉本つとむ（1988）、松村明（1998）、田中章夫（2001）に代表される江戸語から東京語へと「語」の変化に関する研究がある。啓蒙書に現れた「でござる」「である」「ます」などの成立や変化、過去の表現・否定の表現・推量の表現などの変化について、豊富な資料からの用例で忠実に解説している。また、「文体」の歴史的な変化をたどる研究の中からも啓蒙書の用例はよくあげられてきた。代表的な研究には山本正秀（1965、1978）、松下貞三（1966）、木坂基（1976）、進藤咲子（1981）、塩沢和子（1988）、森岡健二（1991）、飛田良文（2004年）などがある。近代の文体研究で大きなテーマの一つである「言文一致」の始まりとして啓蒙書に用いられた文体について詳しく解説している。また、森岡健二（1980）で仮説として述べていた、「東京の共通語は、江戸時代にすでにその基盤になりうる共通語が存在していた」という説は、最近野村剛史（2007）、土屋信一（2009）にも支持されているようである。大変興味深い説であり、その中でも明治初期の啓蒙書は共通語の存在を表す資料として有効性を持っていると思われる。

以上の先行研究の積み重ねで啓蒙書の文末表現の姿はだいぶ明らかになってきたと思われる。主な著作はどのような文末で終わるかによって文語体か口語体か、口語体なら「でござる体」か「である体」かが判明されてきた。しかし、「でござる体」が用いられたことで知られたテキストでは「でござる体」だけが、「である体」が用いられたテキストでは「である」で終わる用例だけが取り上げられることが多い。テキスト全体を一つのまとまりとしてとらえ、その中から「でござる体」「である体」がどう用いられたかを詳しく調べたい。また「でござる体」が現在は日常では使われなくなった理由についても改めて考えてみたい。

2. 啓蒙書の文末表現

明治初期の啓蒙書で、口語を用いたものでもっとも知られているものとしては、「でござる体」によって書かれた、加藤弘之¹の『交易問答』（明治2年）、『真政大意』（明治3年）、西周²の『百一新論』（明治7年）などがある。それから、「でござる体」ではないが、清水卯三郎³の『ものわり の はしご』（明治7年）も、「である体」で書かれた

1) 加藤弘之（かとう ひろゆき 天保7年6月23日～大正5年2月9日。兵庫生まれ。政治学者。著書は前期に『真政大意』（1870年）、『国体新論』（1874年）、天賦人權論から社会進化論に転向後の後期に『人権新説』（1882年）。

2) 西周（にし あまね、文政12年2月3日～明治30年1月31日）石見国津和野藩出身。「哲学」「芸術（芸術）」「理性」「科学（科学）」「技術」など、多くの哲学・科学関係の日本語訳を考案した哲学者・思想家として知られている。

ものとしてよく知られている。

加藤弘之は『交易問答』と『真政大意』を通して早くから「でござる体」という口語体を試みた。『交易問答』は「問答」というタイトルでも分るように、頑六と才助という男が、交易について話すという会話形式のものである。それに対して『真政大意』は、日本の政治体制について欧米と比較しながら自分の理論を解いていくものであり、書き言葉としての口語体で「でござる体」を試みた意義のある作品といえる。従って本稿では『真政大意』の文末を分析することで書き言葉としての「でござる体」を詳しくみてみることにする。

西周は明治初期に「到知啓蒙」の和文体、「生性発蘊」のような和漢折衷体、「明六雑誌」に発表した論文の漢文の読み下し文など、さまざまな文体を試みた⁴。その中で口語体の「でござる体」は、問答式の講義物といわれる『百一新論』で試みられている。『百一新論』は「百教が一致することを論じた新しい論説」という意で儒学に基づいて西洋の学術を分りやすく説いたものといわれている。

清水卯三郎の『ものわり の はしご』は、明治7年イギリスの化学者「とますていとえらむ」が書いた化学入門書を翻訳して出版したものである。「…これは平仮名にて常の話のとほり書き綴りたる解り易い舎密の書なればこれを学ぶ人の階なり」との広告文があるように、普通の化学入門書ではなく、その表記法に文字・文章の改良を試みたもの⁵でもある。全文が分かち書きのひらがなで表記されている上、常体の口語体と「である体」を翻訳文に取り入れたもっとも古いものとして知られている。

3 作品とも、言文一致が本格的に唱えられる前の明治初期に用いられた口語体の実像に迫ることのできる資料と思われる。それでは、文体の特徴がよく現れる各作品の文末表現を中心に詳しくみていくことにする。

2. 1 『真政大意』の文末表現

今回、調査に使用したテキストは、立教大学所蔵大久保文庫所蔵本である。この本は、上下に分かれており、上104文、下109文で構成されている。本文に句読点がなかったため、文末の判定は筆者の判断で決めた。又段落の場合、印はなかったものの、空欄があいておりそれに従った。

以下の表は、文末を抜きだしたものである。

3) 清水卯三郎 (しみず うさぶろう 文政12年～明治43年)武蔵野国埼玉郡羽生村出身の実業家。

4) 森岡健二 (1991)「明治初期の西周の文体」『近代語の成立 文体編』明治書院

5) 山本正秀 (1965)「第八章『ものわり の はしご』と『天路歷程意訳』」『近代文体発生史的研究』岩波書店

<表1 『真政大意』上の文末> (104文)

段	文末
一	コトデゴザル・出来ヌデゴザル・行ハレヌデゴザル・コトニナルデゴザル・知ラネバナラヌデゴザル・モノデゴザル・コトデゴザル (計6文)
二	論ズルデゴザラウ・参ラヌデゴザル・左様デハナイ・論ズルデゴザラウ・イタサネバナラヌデゴザル (計5文)
三	眼目ニナル・ワケデゴザル・存ズルデゴザル・ツケ難イデゴザル・コトデゴザル・要件ガゴザル・モノデゴザル・コトニナル・ナイデゴザル・ナラヌデゴザル・申スデゴザラウ (計11文)
四	モノト見エル・至ラヌデゴザル・生ズルデゴザル・左様デハナイ・決シテナイ・権利ガアル・シテハナラヌ・弁明スル・コトデゴザル・義務ニモナル・称セラレヌデゴザル・ナリ易イ・決シテ立タヌ・出来ヌデゴザル・立タヌトイフ・仰ガネバナラヌデゴザル・コトデゴザル・陥ルデゴザル・論ズルデゴザラウ (計20文)
五	モノデゴザル・ナイデゴザル・権利ガアル・モノデゴザル・所デゴザル・モノデゴザル (計6文)
六	訣デゴザル・コトデゴザル・道理デハゴザラヌカ・申スデモゴザラウカ・心得違デゴザル・確証ガアル・訣デハナイデゴザル・明瞭ナコトデゴザル・ナイデゴザル・夢ニモナイ・覚束ナイデゴザル・道理ハナイデゴザル・ヨラネバナラヌデゴザル・思ハルルデゴザル (計14文)
七	決シテナイ・ナイデゴザル・ナイデゴザル・論デゴザル・居ルデゴザル・用ヒネバナラヌデゴザル・コトデゴザル・所デゴザル・得ラレヌデゴザル・思ハヌデゴザル・出来ルデゴザル (計11文)
八	コトガアル・制度デゴザル・コトハナイ・申サレヌデゴザル・コトデゴザル・コトモアリタデゴザル・得ラレヌデゴザル・ナリタデゴザル・儀デゴザル・所以デゴザル・至リタデゴザル・アルデゴザル・開ケタノデゴザル・立タヌデゴザル (計14文)
九	権利ガアル・ナルデゴザル・致サヌデゴザル・ナイデゴザル・訣デハナイ・権利ハナイデゴザル・コトデゴザル (計7文)
十	アルデゴザル・確言デゴザル・程デゴザル・ナリタデゴザル・アルデゴザル・多イデゴザル・ノミデゴザル・ナラヌデゴザル・イタサネバナラヌデゴザル・離レテハナラヌデゴザル (計10文)

<表2 『真政大意』下の文末> (109文)

段	文末
一	左様デハナイ・アルデゴザル・コトデハナイ・コトデゴザル・致シ方ハナイ・申サレヌデゴザル・訣デハナイ・致スデゴザル・背クデゴザル・ナラヌデゴザル (計10文)

二	ナラヌデゴザル・ナラヌデゴザル・務メルデゴザル・遺憾ハナイ・ナラヌデゴザル・参 ラヌデゴザル・限制シテハナラヌ・モノデゴザル・アルデゴザル・明瞭デゴザル・相 違デゴザル・コトナノデゴザル・風俗デゴザル・左様デハナイ・開化デハナイ・赴イ タノデゴザル・モノデゴザル・多イデゴザル・外ニハナイ・コトデゴザル・陥ルデゴザ ル (計21文)
三	コトデゴザル・コトが出来ル・至ルデゴザル・コトデハナイ・モノデゴザル・不仁政ニ ナル・ナルデゴザル・申スベキノデゴザル (計8文)
四	心得違デゴザル・所デゴザル・訣デハナイ・コトデゴザル・コトデゴザル・決シテナ イ・ナルデゴザル・ナルデハゴザラヌカ・致サネバナラヌデゴザル・セネバナラヌデゴ ザル・宜シクナイ・出来ルデゴザル (計12文)
五	易イデゴザル・コトハナイ・ナルデゴザル・ナルデゴザル・アルデゴザル・道理デゴ ザル・害ハナイデゴザル・心得違デゴザル・訣デゴザル・制度デゴザル・宜シクナ イ・ナイデゴザル・心得違デゴザル・価デハナイ・定価ヲキメル・コトデゴザル・出 来ヌデゴザル・下値ニナル・三百人ハアル・競フテ来ル・高スギル・屹度アル・ナ ラネバナラヌデゴザル・モノデハナイ・コトデゴザル・陥デゴザル・生ジタデゴザル・ 様ニナル・当ルデゴザル・達セラレヌデゴザル (計30文)
六	論モアル・モノデハナイ・ナリタノデゴザル・モノデハナイ・モノデゴザル・アルノデゴ ザル・ナイデハゴザラヌカ・筋ハナイデゴザル・ナルデゴザラウ・暖カデゴザラウカ・ 出来ルデゴザラウカ・訣デハゴザラヌカ (計12文)
七	多クアル・了簡違デゴザル・ナイデゴザル・コトデハナイ・訣デゴザル・コトデゴザ ル・コトデゴザル愚政デゴザル・貴ブデゴザル・陥ルデゴザル・ナリタデゴザル・コ トデゴザル・参ラヌデゴザル・セネバナラヌデゴザル・申シ難イデゴザル・コトデゴザ ル (計16文)

上・下17の段落、213文である。各段落の始まりは「でござる体」ではないが、段落の最後は必ず「でござる体」で終わる。文の構成は213文のうち、助動詞「でござる体」175文（ではない15文を含む）、常体の動詞が26文、「易い・ない」などの形容詞が12文である。

<表3 「でござる体」の活用>

		肯定	否定
断	現在	デゴザル (149)	名詞+デハナイ (15)

定		内訳 名詞+デゴザル (63) 形容詞+デゴザル (18) 動詞の現在形+デゴザル (28) 動詞の過去形+デゴザル (6) 動詞の否定形+デゴザル (34)	
	過去		
推 量	現在	動詞の現在形+デゴザラウ (4)	
	過去		
疑問		動詞の現在形+デモゴザラウカ (1) 動詞の現在形+デハゴザラウカ (1) 形容動詞の語幹+デハゴザラウカ (1)	デハゴザラヌカ (4) 内訳 名詞+デハゴザラヌカ (2) 動詞の現在形+デハゴザラヌカ (1) 形容詞+デハゴザラヌカ (1)

現在の断定の「デゴザル」が149の用例で一番多く使われている。否定の「デハゴザラヌ」の用例がなく「デハナイ」が見えることに注目したい。これは「デゴザル」の前に接続するものと関係があるのではないかと思われる。「動詞+デゴザル」だけの用例を取り出してみると次のようである。

<表4 「デゴザル体」の上接>

現 在 形	アルデゴザル (6)・ナルデゴザル (6)・陥ルデゴザル (3)・出来ルデゴザル (2)・務メルデゴザル・存ズルデゴザル・居ルデゴザル・当ルデゴザル・生ズルデゴザル ・背クデゴザル・至ルデゴザル・致スデゴザル・貴ブデゴザル・思ハルルデゴザル 論ズルデゴザラウ (3)・申スデゴザラウ・ナルデハゴザラヌカ・出来ルデゴザラウカ・ 申スデモゴザラウカ
過	ナリタデゴザル (3)・アリタデゴザル・生ジタデゴザル・至リタデゴザル
否 定 形	ナラヌデゴザル (18)・出来ヌデゴザル (3)・参ラヌデゴザル (3)・得ラヌデゴザル (2)・申サレヌデゴザル (2)・行ハレヌデゴザル・思ハヌデゴザル・称セラレヌデゴザ ル・立タヌデゴザル・至ラヌデゴザル・致サヌデゴザル・達セラレヌデゴザル

以上、68文である。

これは名詞に接続する「デゴザル」の63文を上回る数字である。特に動詞の否定形の

表現については、動詞の否定形に接続する「デゴザル」は34文で、これは「動詞+デ
 (ハ)ゴザラヌ」と同じ意味になるが、「デゴザラヌ」は見え、すべて「否定形+デゴ
 ザル」が用いられている。加藤弘之が「デゴザル」の否定活用を用いなかったわけでは
 ない。疑問文では「デハゴザラヌカ」の否定形を使用しているし、『交易問答』では
 「デモゴザラン・デモゴザルマイ・デハゴザルマイ」などの否定形を使用している⁶。

「デゴザラヌ」の代わりに用いられたと思われる「デハナイ」の場合は、すべてが「名詞
 +デハナイ」であり、動詞につく「デハナイ」は見られない。『交易問答』は明治2年、
 『真政大意』は明治3年刊行で時代差もないはずだが、「デゴザル」の否定形に何ら
 かの使い分けができたのではないと思われる。

そして、過去形も「デゴザツタ」の表現は見え、すべてが「動詞の過去形+デゴザ
 ル」が用いられている。動詞に断定を表す助動詞が直接つくのは、現在使われている
 「だ・である・です」などとは違う使い方である。

その他の文末表現については、文末が「デゴザル体」ではない文は38文で、形容詞
 の現在形が12文、動詞が26文である。動詞は現在形が23文、「シテハナラヌ」などの
 否定形が3文である。現在形の中で「競フテ来ル」の「て形」が一つ見られる。

2. 2 『百一新論』の文末表現

今回、調査に使用したテキストは明治7年に刊行された国立国語研究所所蔵本で、上
 下に分かれているが、上下に内容・文体の差はさほどないと認められるため、ここでは上
 巻だけを調査した。句読点がないため、文末の判断は筆者の判断による。段落もまた特に
 印がなかったため、内容によって筆者が判断したものである。

<表5『百一新論』上巻の文末> (全195文)

段	文末
一	左様デゴザルカ (計1文)
二	左様デゴザル・申デゴザラウ (計2文)
三	モノデゴザル・存ゼラル、デゴザル・訳デハゴザラヌカ・トイフ者ガゴザル・イハレマ スモノカ・承り度イコトデゴザル (計6文)
四	左様デゴザル・一致トハ申スデゴザル・モノデハゴザラヌカ・論シカタウゴザル・知ル コトデハゴザラヌカ (計5文)
五	知レタコトデゴザル・承ハリタイノデゴザル・承ハリ度ノデゴザル (計3文)
六	出来ヌコトデゴザル・云フノデゴザル・意味ニ見タクゴザル・協フデゴザルカ・教ノ意

6) 古田東朔 (2004) 「デゴザル体の文章」『国語論究11言文一致運動』明治書院 p 70

	デゴザル・宜イ訳デゴザル・指スコトデゴザル・当ルコトアリ・見ルテゴザル・難ウゴザル・出来ルコトデゴザル・多イデゴザル・説キ碎カナクテハナラヌデゴザル・題目デゴザル・物デゴザル・コトデゴザルト云フノデゴザル・遣ラフト云フコトハ一致デゴザル・弁ジナケレバナラヌデゴザル (計18文)
七	取り損フタコトデゴザル・モノデハゴザラヌ・心得書ノ類デゴザラフ・見ヘヌデゴザル ・後儒斗リデハゴザラヌ・治メルデゴザラウカ・見ルベキ所デゴザル・謂ハレマセナ ンダ・教化シタコト見ヘ申サヌ・見エルデゴザル・云レタコトデゴザル・教ヘタ物ト 見ユ・兼ネタコト思ハル・困ルデゴザル・止メタガ宜イ・モノデゴザル・楽ノコトダ・ イツタモノデゴザル・礼ト云ツタ・知ラレルコトデゴザル・見ネバナラヌコトデゴザル・ 民人ヲ序ツ・意味デゴザラウ・明白デゴザル・見エルデゴザル・書ヲ著シタ人カ・ 明白デゴザル・ナドノ論モアル・意味デゴザル・間違デハゴザルマイカ・スルノデゴ ザラウ・存ズルデゴザル・亡ビテ伝ハラズ・及バナデゴザラウ・数フベキデゴザラヌ・ 精シイ方デゴザル・見エルデゴザル・様デゴザツタコト見エル・替シテゴザル・分 ルデゴザル・事デゴザル・ハナラレタデゴザラウ・出来ルデゴザル・見エルデゴザ ル・聞ク可ラズ・間ニモ合ハズ・モノデゴザル・御骨折デゴザツタ・置カレタノデゴ ザル・潰レタデゴザル・訳デハゴザラヌ・掛ツタモノデゴザル・立タナカツタデゴザル ・比スベク存ズレ・コトガゴザル・名ヲ更タデゴザル・混同シテ居ツタデゴザル・行 ハレナダコトデゴザル・勿論ノコトデゴザル・反ツタデゴザラウ・法トナツタデゴザル ・見エルデゴザル・違ツタ事デゴザル・酒トナルデゴザル・異ニセネバナラズ・ナル モノデゴザル・宜シイデゴザラウ・者が存スルデゴザル・カラデハゴザルマイカ・通ジ タコトデゴザル・立ツタデゴザラウ・取り出シタデゴザラウ・法ト云ツタデゴザル・存 ズルデゴザル (計74文)
八	耳デハゴザラヌカ (計1文)
九	存ズルデゴザル・道具デゴザルコトハ同様デゴザル・相違ガナイデゴザル・所ガゴ ザル・差ガゴザル・違ヒガゴザル・悪ヲ耻トハ思ハヌ・一大僻見デゴザル・宜イ所 デゴザル・宜イカト存ズルデゴザル・余儀ナイコトモゴザツタ・論ズルデゴザラウ・考 ヘテ見ネバナラヌ宜デゴザル・寐言デハゴザルマイカ・四本アツタ人デハゴザルマイカ ・今ハ世ニ無イ者デゴザラウカ・物デゴザラウト存ズル・見分ネバナラヌデゴザル・ 開ケナカツタコトデゴザル・見ルベキコトデゴザル・名ヅケタデゴザル・公平ナリ・ア ルベキ時世デゴザツタ・懸隔ノ違ガゴザル・奉ゼヌコトガ常デゴザツタ・風俗デゴザ ツタ・虚言デハゴザラヌ・論ゼナケレバナラヌ宜デゴザル・浮世トナツタデゴザル・出 来ル様ニナツタデゴザル・書ネバナラヌ世ニナツタデゴザル・世ニナツタデハゴザルマ イカ・種ニナツタデゴザル・訳デゴザル・同様ナコトデゴザル・訳デハゴザルマイカ ・取ツタデゴザル・上手デゴザツタ・出来ヌコトデゴザル・見ラレタデゴザラウ・申ス デゴザラウ・様ニナツタデゴザル・少シ早カツタ・涙ヲ流サレタ・権ヲ取ルベシ・云フ 話ガゴザル・取ルニ足ラズ・見エルデゴザル・異見シタコトガゴザル・急ヲ救フナリ

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見エルデゴザル ・ 鋳タト見ユ ・ 言ハレタコトガゴザル ・ 私曲デゴザラウ ・ 謂ハレルデモゴザラウ ・ ニナツテ来タデゴザル ・ アルモノデゴザル ・ デハ有マイカト存ズル ・ 替ハルデゴザル ・ 違ヒガゴザラウカ ・ 御話申スデゴザラウ (計61文)
十	<ul style="list-style-type: none"> 謙遜ノ意モ含マズ ・ 見エルデゴザル ・ 意デゴザル ・ 善ク真ヲ失ハシム ・ 一ツニナル物デゴザル ・ 綜覈ネバナラヌ ・ 刑名ヲ主トス ・ 云ツタデゴザル ・ ナシタノデゴザル ・ 開イタデゴザル ・ 治デハゴザラヌカ ・ コトハナツタデゴザル ・ 見エルデゴザル ・ 参ルマイデゴザル ・ 事ガゴザル ・ 悪イデゴザル ・ 訳デハ少シモナイデゴザル ・ 法デゴザル ・ 知レヌデゴザル ・ 風習デゴザル ・ 罪デハゴザラヌ ・ 国柄ダト存ズル ・ 出来マスマイデゴザル ・ 別ルデゴザル (計24文)

10の段落、195文の構成である。10番目の段落を除いて、すべての段落が「でござる体」で始まり、「でござる体」で終わる。195文のなかで、「…国柄ダト存ズル」のように動詞で終わるのは34文、「…止メタガ宜イ」のように形容詞で終わるのは2文、「…書ヲ著シタ人カ」のように助詞で終わるのは2文、「公平ナリ」のように古語の助動詞で終わるのが9文、助動詞で終わるのは150文である。

「でござる体」と「だ体」を含む助動詞の活用は次の通りである。

<表6 助動詞の活用と上接>

		肯定	否定
断定	現在	名詞+ダ (1) デゴザル (105) 内訳 名詞+デゴザル (51) 形容詞+デゴザル (4) 動詞の現在形+デゴザル (24)動詞の過去形+デゴザル (17)動詞の否定形+デゴザル (9)	名詞+デハゴザラヌ (7)
	過	名詞+デゴザツタ (6)	
推量	現在	名詞+デゴザラウ (4) 動詞の現在形+デゴザラウ (5) 動詞の過去形+デゴザラウ (5) 動詞の否定形+デゴザラウ (1) 形容詞+デゴザラウ (1)	
	過		
疑問		デゴザルカ (2)	名詞+デハゴザラヌカ (5)

	デゴザラウカ (2)	名詞+デハゴザルマイカ (5) 動詞の過去形+デハゴザルマイカ(1)
--	------------	---------------------------------------

現在の断定の「デゴザル」が105文で一番多く見られた。否定でも「デハゴザラヌ」の「デゴザル体」が使われている。名詞に接続する「デゴザル体」が78文、「用言+デゴザル体」が67文である。『真政大意』と同じく、接続する用言に色々な活用形がある。「動詞+デゴザル」だけの用例を取り出してみると以下のようである。

<表7 「デゴザル体」の上接>

現 在 形	見エルデゴザル (9)・存スルデゴザル (5)・困ルデゴザル・酒トナルデゴザル・出来ルデゴザル・申スデゴザル・替ハルデゴザル・分ルデゴザル・別ルデゴザル ・存ゼラル、デゴザル 謂ハレルデモゴザラウ・申スデゴザラウ (3)・論ズルデゴザラウ・協フデゴザルカ・治メルデゴザラウカ・見ルデゴザル
過 去 形	ナツタデゴザル (6)・立タナカツタデゴザル (2)・居ツタデゴザル・云ツタデゴザル ・開イタデゴザル・更タデゴザル・取ツタデゴザル・潰レタデゴザル・名ヅケタデゴザル・来タデゴザル・ ハナラレタデゴザラウ・見ラレタデゴザラウ・取り出シタデゴザラウ・反ツタデゴザラウ・立ツタデゴザラウ・ナツタデハゴザルマイカ
否 定	見ヘヌデゴザル・見分ネバナラヌデゴザル・砕カナクテハナラヌデゴザル・参ルマイデゴザル・知レヌデゴザル・弁ジナケレバナラヌデゴザル

「ノ」の介入なしで直接「デゴザル」が付いている。特に否定形の場合は「見分ネバナラヌデゴザル・砕カナクテハナラヌデゴザル・弁ジナケレバナラヌデゴザル」のように、連語の「なければならぬ」の表現が多いのが、『真政大意』の否定形とは違うところである。

次は動詞で終わる文の詳細である。

<表8 動詞の活用>

		常体		敬体	
		肯定	否定	肯定	否定
断 定	現在	22	ヌ3・ズ6		
	過去	タ2			謂ハレマセナンダ

常体の否定形に「ない」は使われていない。それから唯一「ます体」の「謂ハレマセナンダ」が一つ見える。その用例は次のようである。

○論語二十篇ノ内孔門デ第一義トイフ仁トイフコトヲ門弟子ガ問フトイツモ克己トカ大賓ヲ見ルガ如シトカ云ツテ修己ノ工夫ナラデハ謂ハレマセナンダ

現在の表現では「…謂われませんでした」になる。「なんだ」は「なかった」という過去否定の表現で江戸時代からよく使われていた。「ませなんだ」の変化については後に詳しく述べることにするが、「デゴザル体」と常体の動詞が続く中で、「ます体」が一つだけ見られたのは、他では例を見ない使い方と言えよう。

動詞の断定の現在形では「ゴザル」が14文見えるが、11文は「…ガゴザル」「…替シテゴザル」で、今の言い方だと「…がある・いる」「替してある・いる」になり、「ござる」が「ある・いる」の代わりに使われていたことがわかる。残り3文は「論シカタウゴザル・意味ニ見タクゴザル・難ウゴザル」で、「ある・いる」の使い方とは違う、むしろ「なる」に近い使い方を取っているのがわかる。

そして、口語の助動詞「デゴザル体」以外にも「当ル筈アリ・教ヘタ物ト見ユ・比スベク存ズレ・公平ナリ・急ヲ救フナリ・鑄タト見ユ・善ク真ヲ失ハシム・権ヲ取ルベシ・聞ク可ラズ」のように、文語の助動詞も用いられているのも『百一新論』の特徴である。

2. 3 『ものわり の はしご』の文末表現

調査で使用したのは国会図書館所蔵本のマイクロフィッシュのコピー本である。全三巻で構成されているが、各巻の文体の差は見られなかったため、本稿では第一巻だけを調査・分析することにした。句読点是用いられてなかったため、文末の判断は筆者による。段落は著者が小タイトルをつけてあったので、それに従った。

『ものわり の はしご』の第一巻の文末は次の通りである。

<表9 『ものわり の はしご』の文末> (338文)

各段のタイトル	文末表現
序	あひづ で ある・いろは で ある・あり と いふ・こと は ない・おもわれる・ひらけぬ・とひはかる・そう と いふ・ほど で ある・ひと で ある・ところ で ある・そなふ・もの で ある・かなめ で ある (計14分)
ふろく	とひねがふ・ある の で は ない・もの で ある・いひ こたふ・わけ から で ある・あてはめたのである・そへる・もちゐる・しるし と する (計9文)

ためしたてのものの わりまるびひとつめ のおほきり	まるびである・じふである・つくりである・ものが ない・さだむる・からである・ものである・ものである ・ものである・ものとなる・くろがねでもない・わける ・あげる(計13文)
かなもどきのおほ ね	ものである・まじろひものである・まじろひものである・ なぞらへてしれ(計4文)
ひくちからのかえり たぐひ	たぐひがある・わけである・ひくちからである・なづくる ・きまりがある・ことである・ひきつける・ひくちからとい ふ・へばりつく・へばりつく・はなれぬ・あひだにある・もちあふ のである・かわりてゐるのである・ひとつである・ あがる・のぼる・ものである(計18文)
ものわりのひくちか らすなわち したしみ	かげもなくなる・あひだにある・つくる・できる・できばえ である・まじろひといふ・ほごろひといふ・わけであ る・りにめんといふ・ものとなる・ゆえである・ばあひ である・あむもにやとなる・うかむ・なづくる・しるといふ ・たまる・ばあひである・のこる・なづくる・ものである・き ゆしばひとなる・ことはない・ばかりである・なりたの である・なぞらへてしれ(計26文)
す、とあとのう まれだち	しるである・くわへる・かわる・ことである・かへる・あと である・くわへる・あぢはない・もどる・とほりである・か へる・ものである・もちゆる・くわへる・なづける・もので ある・ことである・わりなづける・かぶせかける・おちつもる・あ ぢがある とけしるとなる・あむもにやとなる・ものである・あとと なる・なぞらへてしれ・のぼる・きえる・とける・すととなる(計 30文)
とけしる	える・ものである・けしきもない・できる・とかすので ある・とける・ものである・できる・うかむ・とけしるである ・できる・やうになる・のこる・えりおどむといふ・しづむ・ できる・むつぶのである(計17文)
ふたつめのおほき り	すみとなる・すみねである・すみねである・ふくむ・す となる・ものである・あわだつ・なるのである・ぬけで るのである・とどまる・ わからない・わかる・きえる・つかぬ(計14文)
みづね、みづの まじろひ	しるである・ものである・うちにある・まぜる・つぐ・お ちる・やうにする・ふせぐ・もえる・こともある・ことは

	ない・とどまる・とびちる・たまたぬ・たまりつく・おこす・ひびき である・さしこみて み よ (計18文)
すいね、と むせびね あまつほのけ	ふくむ・きえる・わけ である・ためし を みよ・たてる・きえる ・わけ である・きえる・しぬ・たふれる・くだる・おちる・きえる ・まざる・ためし を み よ・ふきだす・たえる の である・ たもつ つくす・のこす・おく・ばかり と なる・がす である・わかる ・ふさぐ・みえる・ひこむ・やう に する・あかるく なる・ほのほ が たつ・こと が しれる・しるし である (計32文)
あむもにや	もの である・とける・ろくかくせい と いふ・しほ と なる・ おこり である・こやす・もの である・しれる・にほひ が する ・おこる・おこる・けぶり が たつ・けぶり が おこる・ぬけで る・くわへる・とけしる と なる・ぬけである (計17文)
むせび の す、す なはち せうせきせい	しる である・とり わける・ことわり である・やしなふ (計4 文)
あまつねのけ	なづける・うちひろがりて ゐる・ところ は ない・ふき はらふ・ ことは ない・はたらく・わけつたへる・わざもの である・むづか しい・ちりかかる・おこる・おとす・もやだち である・もの で ある・つかさどる・そなへる・かねる・ことのふて ゐる・ところ で ある・そなへる・やしなふ・おぎなふ・あげる・もの とて とる・こ と なし・たから である (計26文)
ためし、ふねうまてく とて けぶものを あづかふ しかけ の ためし	おしあげる・もちゆる・かかりとどまる・ながれ おちる・ふみ を み よ・とどまる・いりかわる・わかる・もちゐる・たな が ある・ そなへる・やう と いふ・あてる・いりかわる・いれる・はめる・あ てる・ほこれである・こもりて ゐる・きよらか で ない・こころえ よ ・うつる・まし である・はひる・ひきぬく・とどいて ゐる・みしら べる・つぐ・おしだす・こと である・いりかわる・あける・のぼる ・とれる (計34文)
いわり	しる である・でる・いである・いだす・つもる・ためし を み よ・しづむ・もの である・しる である・くるく なる・もえる ・もちゐる・こころえよ・こころえ よ・きをつけ よ (計15文)
おにびね	もの である・にて ゐる・うち に ある・こする・もえおこす・ あわはれる・ためし を みよ・みえる・わけ である (計9文)
ふうどね	もつ・うち に ある・ばかり である・もちゐる・こりつもる・こげ ちやいろ と なる・もえたてる・こと は ない・のり と なる (計9文)

おほね	むきかへる・こと は ない・たすける・もえおこる・もの と なる ・うみあこね で ある・す で ある・もちるる・けす・くわへる ・みちる・もえる・しろく なる・はなれて である・もの で ある・ けす・できる・ひ が つく・ふきさく・つく・なり ひびく・もす (計22文)
みづしほ の す	がす で ある・しる と なる・みちる・かわる・こと で ある ・けす・うみあこ と なる (計7文)

20の段落、338文の構成である。最初の段落では14文のうち7文が「である体」だが、その次の段落からは「である体」は少なくなる。「である体」で始まる段落は10、「である体」で終わる段落は6で、段落において文末の構成「でござる体」に比べて自由に感じる。全338文のうち動詞242文、形容詞11文、「である体」の助動詞85文のサンプルな構成になっている。

まず、動詞の活用をみると、次の通りである。

<表10 動詞の活用>

		普通体	
		肯定	否定
断 定	現在	218+6	ない (1)ぬ (4)
	過去		
命令			13

現在形は224文であったが、そのうち「て ある」が1文、「て ゐる」が5文含まれている。

命令は「なぞらへて しれ (3)・ためし を み よ (4)・ころえ よ (3)・さしこみて み よ・ふみ を み よ・きをつけ よ」の13文が見える。

<表11 「である体」の活用>

		普通体	
		肯定	否定
断 定	現在	で ある (82)	では ない (1)・でも ない (1) で ない (1)
	過去		

のように現在の肯定と否定だけの簡単な活用であり、すべて名詞に接続している。文末は断定の肯定と否定・命令形だけが使われたシンプルな文であるが、分かち書きの方法で清水卯三郎が考えていた日本語文法の断面が窺える。『ものわり の はしご』の分かち書きは文節単位の分かち書きや品詞単位の分かち書きよりは、助詞・助動詞などのいわゆる「非自立語」もすべて分けて書いる。分かち書きの特徴が現れている文をみてみると、

○なほ ふたつ め の きり の 四 の ためし を み よ

のように、「ふたつめ」という複合形も、「の」や「を」などの助詞も、「み よ」の活用もすべて分けている。文節のような分け方は江戸時代の文献にもすでにあった⁷⁾といわれているが、『ものわり の はしご』は全文がひらがなで書かれているため、もっとも分かりやすい表記としてこのような形になったと思われる。

3. 啓蒙書の文末表現の特徴

3. 1. 「でござる体」と「である体」の違い

以上、明治初期の啓蒙書3作品の文末表現を調べてみた。3作品ともに著者が分かりやすい口語体を用いた意識がはっきりしているもので、明治3年から7年までの作品である。「でござる体」は武士のことばとして知られていて、加藤弘之も西周も武士出身であるため、身近な表現を用いて文の口語体化を試みたと思われる。一方、商人出身の清水卯三郎が、明治初期の指定表現としてよく用いられた「でござる体」「でございます体」「じゃ体」などを使うことなく「である体」だけを用いて口語体を書いたことは注目すべきところであると思われる。「である体」が特定の階級のことばという印象が薄く、一般的に受け入れやすい性格を帯びていたのかもしれない。

表記上、3作品とも句読点はないが、文末に用いる活用の数が少なく、ある程度一定した文の括り方をしている、全体的に分かりやすかったといえる。特に文字においては、「でござる体」にはカタカナが、「である体」には平仮名が使われているが、明治初期には分かりやすい文字を目指してローマ字で書いた文章もあり、分かち書きと共に、色々な形が模索されたといえる。

段落の構成における文末の配置を見ると、『真政大意』は必ず各段の最後に「でござる

7) 『日本語文法大辞典』(2000)の「文節」によると、本居春庭の『詞通路』で「深草の」「さびしさも」「すみ」などの分け方を示していたという。

体」を用い、『百一新論』は各段の最初と最後に「でござる体」を用いているが、『ものわり の はしご』は最初の段落だけが最初と最後に「である体」を意識したようで、その下の段では、内容によって自由な文末を用いている。用いられた指定表現は『真政大意』は「でござる体」だけだが、『百一新論』は「でござる体」が多数を占めるなか、「だ体・なり」なども用いられた。『ものわり の はしご』は「である体」だけが用いられた。全体的な構成においても、『真政大意』は213文のうち160文、75%の「でござる体」が、『百一新論』では195文のうち150文、76%の「でござる体」が使われている一方、『ものわり の はしご』は338文のうち「である体」は85文、26%を占めている。また「でござる体」と「である体」の接続と活用においてもその差ははっきりしている。『ものわり の はしご』の「である体」は名詞に接続する現在の「断定」でしか用いられなかったが、『真政大意』と『百一新論』の「でござる体」は接続も、その活用も複雑な様子である。

まず「でござる体」の接続についてしらべてみると、次のとおりである。

『真政大意』の「デゴザル体」149文のうち、名詞に接続するのは63文（42%）、形容詞に接続するのは18文（12%）、動詞に接続するのは（現在形28文・過去形6文・否定形34文）68文（46%）である。『百一新論』は「デゴザル体」105文のうち、名詞接続は51文（49%）、形容詞接続は4文（3%）、動詞接続（現在形24・過去形17・否定形9）50文（48%）である。用言に接続する場合、現在の「だ」「です」とは違って、「の」の介入なしで接続する用例が多く用いられた。例えば「見エルデゴザル・存スルデゴザル・存ゼラル、デゴザル」のように、動詞の終止形に「デゴザル」がついたり、「ナツタデゴザル・立タナカツタデゴザル」のように過去形についたり、「見ヘヌデゴザル・参ルマイデゴザル・弁ジナケレバナラヌデゴザル」のように否定形についたり、「申シ難イデゴザル・筋ハナイデゴザル・多イデゴザル」のように形容詞についたりする用例が数多くみえた。しかし、すべての形容詞・動詞が「デゴザル」に上接したわけではなく、『真政大意』では形容詞で終わる文が12、動詞で終わる文が26文見え、『百一新論』でも形容詞で終わる文が2、動詞で終わる文が33文見えた。つまり、同じ内容の終わり方が二通り共存していることになる。常体の形容詞・動詞で文が終わるのが当たり前になった現在から見ると、わざわざ「デゴザル」をつけたという感覚を覚える。現在の「…のである」「…のだ」の「の」だけが省略されたとみることでもできるが、『真政大意』には「…ノデゴザル」が5文、「コトデゴザル」が21文、「モノデゴザル」が10文、『百一新論』には「…ノデゴザル」が6文、「コトデゴザル」が18文、「モノデゴザル」が7文も用いられていて、形式名詞がはさむ形とのなんらかの使い分けがあったのではないかと考えられる。現在の指定表現の役割である、名詞に接続し一つの文を成立させる「名詞＋だ・である」に加え、文の主成分ではないが、何らかの意味・ニュアンスを添える終助詞的のように用いられたのではないかと考えられる。

次は、『真政大意』と『百一新論』の「でござる体」の活用について調べた表である。

<表12 啓蒙書の「デゴザル体」活用>

		真政大意		百一新論	
		肯定	否定	肯定	否定
断 定	現	デゴザル		デゴザル	デハゴザラヌ
	過			デゴザツタ	
推 量	現	デゴザラウ		デゴザラウ	
	過				
疑問		デモゴザラウカ デハゴザラウカ	デハゴザラヌカ	デゴザルカ デゴザラウカ	デハゴザラヌカ デハゴザルマイカ

両者の差は否定形での「ではない」「ではござらぬ」のどちらを使用したか、過去形の「でござった」の有無だけで、他の断定表現ともあまり変わらない。
また、現在の語形と比べて見ると、「～ではなかった」にあたる断定の過去否定表現と「～だっただろう」「～ではなかっただろう」にあたる推量の過去表現以外はある程度そろっていたことがわかる。「でござる体」にはない、「～ではなかった」「～だっただろう」「～ではなかっただろう」の言い方は日本語の変化がよく現れるところでもある。田中章夫(2001)⁸によれば、

「古代語の言い方と、現代語の言い方を比べてみると、古代語は助動詞の使い分けによって、複雑な、さまざまな推量表現を言い分けている。これに対して現代語では、この複雑な表現内容が、いくつかの単純なブロックに分けられてしまい、それら単純な表現単位のコンビネーションによって表されている。1)整理(単純)○江戸語には推量の助動詞として「う」「よう」「まい」の三種があったが、現代語では「だろう」一種になってきた。○江戸語には、打ち消しの助動詞として「ない」と「ぬ」との対立が広くみられ、さらに、その過去形としては「なんだ」があった。しかし現代では、過去も現在も「ない」系統のもの一本になり、「ぬ」は「ません」の形で敬体にみられるだけになった。(中略)2)分散○「まい」の終止法は、打ち消しの意志、打消しの推量を表す助動詞として、江戸語では大活躍していたが、現代語では、あまり使われなくなり、「打消しの表現」と「意志、推量」の表現とが、別々の表現単位にわかれてしまって、「打消しの推量」は「…ないだろう」「…ないらしい」で、また「打消しの意志」は「…ないつもりだ」「…はよそう」とい

⁸田中章夫(2001)『近代日本語の文法と表現』明治書院

う形で表現されるようになってきた。○江戸語の「打消しの過去」は、助動詞「なんだ」によって表されたが、現代語では「なかった」という形、すなわち、打ち消しの助動詞「ない」プラス、過去の助動詞「た」という形になっている。

と述べている。つまり、「～ではなかった」「～だっただろう」「～ではなかっただろう」などの表現は「過去」「否定」「推量」を表す意味のブロックが単純・分散した変化を経てからの表現で、「でござる体」はその現代語的な使い方まで発展することなく消滅したのである。

3. 2. 「でござる体」の消滅

「でござる体」は江戸時代から講義や講釈に広く使われており、方言の壁があった当時の日本には地方性がない表現として受け入れられたかも知れない。しかし明治初期の啓蒙書や演説の一部を除けば、使用率も高くない上、小説の文体としては用いられることなく消滅した。

その原因については、次の三つが考えられる。

第一は外部からの影響として、その使い手がなくなったことである。「でござる体」はすでに江戸後期から次第に使われなくなるという傾向にあったし、明治以降は四民平等で身分の差がなくなり、もともと武士の言葉¹⁰として使用範囲が狭かった「でござる体」は姿を消すようになったことが考えられる。

第二に「デゴザル」という言葉のそのものが、衰退の原因をはぐくんできたのではないかと考えられる。「デゴザル体」が用言に接続したり、しななかったりという用例が同一資料で多く繰り返されて、無駄な表現のような印象を与える。一つの表現が担う役割が単純化されていく近代語の流れの中で、付けなくてもいい「デゴザル」は使われなくなってきたとも考えられる。

第三は「デゴザル体」の待遇性の問題である。同じ意味の単語でも、使う場面が違えばそれぞれが残るものだが、「でござる」に「ます体」がついた「でございます体」が広く使われるようになり、丁寧な「デゴザル」は待遇性があいまいになってきたのも消滅した原因の一つとして考えられる。

しかし、「でござる体」は一時期の限られた使い手によってではあるが、口語を文章に用いるときの文末表現として確かに機能していた。明治時代の「だ体」「である体」など

9) 杉本つとむ (1988) 「近代日本語と東京語の世界」 『東京語の歴史』 中公新書

10) 古田東朔・前掲書 p 72

より現在の語形に近い形でそろっていたこともあり、以後の「言文一致」への動きに方向性は提示することができたと考えられる。

4. 終わりに

近代の文末表現は、一般的に、テキストの中で用いられた指定表現によって「でござる体」「でございます体」「であります体」「である体」「です体」「だ体」などに分類、研究されてきた。しかし実際のテキストをみると、上記の指定表現は一部であり、動詞で終わる文、形容詞で終わる文など、さまざまな文末が存在する。文末を全体的にとらえ、その中から指定表現を考察する必要があると思われる。従って、本稿では、明治初期の啓蒙書で口語を用いたものでもっとも知られている三つのテキストを選び、その文末表現を全体的に調べ、分析してみた。

加藤弘之の『真政大意』（明治3年）と西周の『百一新論』（明治7年）は「でござる体」を用いたことで、清水卯三郎の『ものわり の はしご』（明治7年）は「である体」で書かれたものとしてよく知られている。『真政大意』と『百一新論』は全体の文の中で「でござる体」がしめるのが75%、76%で、各段落の始まりか終わりに「でござる体」を用いるという傾向が見えたが、『ものわり の はしご』の「である体」は全体の26%で、各段落の中で比較的自由に用いられていた。「でござる体」と「である体」は接続と活用にも大きな差があった。「でござる体」は体言だけではなく用言にも接続し、上接する用言も動詞・形容詞の活用など、現在の指定表現とは異なり、体言に接続し一つの文を成立させる役割だけではなく、何らかの意味・ニュアンスを添える終助詞的な用法でも使われていたと考えられる。『ものわり の はしご』の「である体」は体言に接続する用例しか現れなかった。また活用においても「でござる体」は断定・推量などさまざまな形が現れたが、「である体」は断定でしか用いられなかった。しかし、「でござる体」の場合は、「～ではなかった」「～だっただろう」「～ではなかっただろう」のように過去・否定・推量を表す表現まで発達することなく消滅したのである。「でござる体」が消滅した原因として、使い手がなくなったという外的な要因のほかに、文の中でも役割や用い方上記の特徴が働いたと断定することは難しい。しかし、テキストの文末を全体的調べ、同じ時期の「である体」と比べることで、ほかの指定表現との違いは明らかにすることはできたと思われる。

今回は「デゴザル体」を中心にした考察になったが、口語資料の中ではすでに室町時代からも「である体」が用いられていて、明治初期の「である体」の実態についても、対象の資料を広げ調べる必要があると思われる。今後は、小新聞や演説など明治初期のほ

かのジャンルのテキストの文末表現を調べて比較していくとともに、心学道話など啓蒙書の前に存在していたとされる「共通語」の流れについても調べていきたいと思う。

【参考文献】

- 木坂基 (1976) 『近代文章の成立に関する基礎的な研究』 風間書房
 国立国語研究所 (1959) 『明治初期の新聞の用語 国立国語研究所報告15』 秀英出版
 佐藤武義 篇 (2005) 『概説現代日本語のことば』 朝倉書店
 進藤咲子 (1981) 『明治時代語の研究 語彙と文章』 明治書院
 杉本つとむ (1988) 『東京語の歴史』 中公新書
 杉本つとむ (1998) 『杉本つとむ著作選集2 近代日本語の成立と発展』 八坂書房
 田中章夫 (1981) 『東京語その成立と展開』 明治書院
 田中章夫 (2001) 『近代日本語の文法と表現』 明治書院
 辻村敏樹 (1968) 『江戸言葉の研究』 東京堂出版
 飛田良文 編 (2004) 『国語論究11 言文一致運動』 明治書院
 古田東朔 (2004) 「デゴザル体の文章」 『国語論究11言文一致運動』 明治書院
 松村明 (1998) 『江戸東京言の研究』 東京堂出版
 森岡健二 編 (1991) 『近代語の成立 文体編』 明治書院
 山本正秀 (1965) 『近代文体発生の史的研究』 岩波書店
 山本正秀 編 (1979) 『近代文体形成史料集成』 桜楓社
 湯沢幸吉朗 (1954) 『江戸言葉の研究』 明治書院
 松村明 (1993) 「『語学独案内』における打消の助動詞「ない」「ぬ」とその用法」 『近代語研究 第9集』 武蔵野書院
 宮地幸一 (1965) 「移りゆく断定表現」 『近代語研究 第1集』 武蔵野書院
 松下貞三 (1966) 「論説における近代口語文の変遷」 『同志社国文学』 同志社大学国文学会
 塩沢和子 (1988) 「明治初期の啓蒙書の文体：『真政大意』『百一新論』を中心として」 『文芸言語研究. 言語篇』 筑波大学
 森岡健二 (1980) 「口語史における心学道話の位置」 『国語学』 国語学会
 野村剛史 (2007) 「明治スタンダードと言文一致」 『文学』 岩波書店

要 旨

明治初期の啓蒙書で、口語を用いたものでもっとも知られている加藤弘之の『真政大意』(明治3年)、西周の『百一新論』(明治7年)清水卯三郎の『ものわり の はしご』(明治7年)の文末表現を全体的に調べ、分析してみた。

『真政大意』と『百一新論』は全体の文の中で「でござる体」がしめるのが75%、76%で、各段落の始まりか終わりに「でござる体」を用いるという傾向が見えたが、『ものわり の はしご』の「である体」は全体の26%で、各段落の中で比較的自由に用いられていた。「でござる体」と「である体」は接続と活用にも大きな差があった。「でござる体」は体言だけではなく用言にも接続し、上接する用言も動詞・形容詞の活用など、現在の指定表現とは異なり、体言に接続し一つの文を成立させる役割だけではなく、何らかの意味・ニュアンスを添える終助詞的な用法でも使われていたと考えられる。『ものわり の はしご』の「である体」は体言に接続する用例しか現れなかった。また活用においても「でござる体」は断定・推量などさまざまな形が現れたが、「である体」は断定でしか用いられなかった。しかし、「でござる体」の場合は、「～ではなかった」「～だっただろう」「～ではなかっただろう」のように過去・否定・推量を表す表現まで発達することなく消滅したのである。「でござる体」が消滅した原因として、使い手がなくなったという外的な要因のほかに、文の中でも役割や用い方に上記の特徴が働いたと断定することは難しい。しかし、テキストの文末を全体的調べ、同じ時期の「である体」と比べることで、ほかの指定表現との違いは明らかにすることはできたと思われる。

キーワード：明治初期 啓蒙書 文末表現 『真政大意』 『百一新論』
『ものわり の はしご』 指定表現 「でござる体」 「である体」

투 고 : 2009. 11. 30
1차 심사 : 2009. 12. 12
2차 심사 : 2010. 01. 09